

泉龍寺のまわり地蔵

狛江駅の近く、元和泉一丁目にある泉龍寺には、江戸時代の中ごろから近郷近在に知られていた子安地蔵尊が、いまもまつられています。

本堂内陣の奥深く、厨子に入って安置される地蔵尊は、台座ともに40センチ余り、左手に小児を抱いた、像高18センチほどの木造の坐像です。造立年代は安永年間（1772～1781）、施主は神田紺屋町上州屋弥次兵衛で、その妻が「本願主」となっています。

この地蔵尊は、通称を子育て地蔵といい、他村の人たちの間では「和泉の地蔵さん」と親しまれ、また「まわり地蔵さん」などともよばれてきました。地蔵尊には、子授け、安産、子育てなど



にかかわる数多くの霊験譚が生まれ伝えられて、江戸市中をはじめ、近郷の諸所方々に信者もふえ、講中がつくられていたのです。地蔵尊は、講中の人たちの家々に迎えられて、一夜ずつの宿りをしながら、25日から翌月22日まで、1ヵ月近くの間、宿から宿へとまわり、24日の縁日の前日には寺に帰るといって、巡行がおこなわれていました。まわり地蔵のよび名は、この巡行に由来し、お宿は一夜限りと定められていたところから、一夜地蔵ともよばれました。

地蔵尊の出開帳ともいえる巡行は、造立当初の江戸中期から始められ、ところによっては第二次大戦末の昭和19年まで続いていました。その長い歴史のなかで、明治維新の廃仏毀釈の折、巡行中の地蔵尊が講中の講元の家の土蔵にかくまわれて難を逃れた話、次の宿へと送られる途中、本土初の空襲にあった話なども伝えられています。

巡行地域は、時代によって移り変わりますが、本所・神田・日本橋、青山・四谷など江戸市中をはじめ、巣鴨・上駒込、板橋・豊島・練馬・十条方面から、上祖師谷・大蔵・上北沢・松原・高井戸など世田谷・杉並方面、立川を中心とする多摩地域、川崎市の一部、および、入間・所沢・坂戸など埼玉県にまで及んでいました。

地蔵尊の巡行には、江戸時代から明治時代の末近くまでは長持が使われ、厨子に入った地蔵尊とお札、それに幟や幕、ろうそく立て、香炉、茶湯仏器や膳椀など、遷座の供養に必要な道具一式を納めた長持を、寺の男衆たちが担いで、その月の講中の世話人のところへ送って行きました。その後、大八車に似た手車（御所車みたいなという人もあります）を用いるようになり、この車に、地蔵尊と遷座の道具一式を入れた、寺の九曜星の紋の付いた黒塗りの木箱をのせて、ひいて行ったものでした。車には「延命子安地蔵尊」と墨で書かれた幟旗をくくりつけ、目ざす集落に入ると鉦をたたきながら、最初の宿の家（講元とか世話人の家）に送り届けます。これ以後は、地蔵尊が寺に帰るまでの間、それぞれの地域の世話人が取り仕切りながら、お宿を希望する家々をまわります。集落の内など近場での巡行には、ぼろ布を編んでつくった背負い紐の付いたショイコで、地蔵尊を背負って運ぶこともありました。

宿の家では、座敷の床の間などに幕をめぐらして地蔵尊を安置し、お明かりを上げ、線香を立て、供物を上げて、お参りの人々を待ちます。地蔵尊の到着を知らせる鉦の音を聴いて、集まってくる子ども、年寄りに連れられてくる子どもなど、お参りの人のなかでは子どもと年寄りが多く、また、子どもの無事な成長を祈る親、子授けを願う親、妊婦やその家族、近所の人たちなど、次々にお参りにやってきました。この夜、宿の家では、念仏講中のおばあさんたちの念仏とか、子どもたちが中心の百万遍の念仏などもあって、にぎやかな夜になります。

子育てなどを祈願して供えるものは、端ぎれを縫って綿を入れて作ったカキヤサル、人形、よだれ掛け、頭巾、じゅばん、千羽鶴など。足の悪い子どものために、わらじを上げることもありました。子どもたちは、習字や図画などを供えて、その上達を祈り、女の子は、お針が上手になるように、カキなどを作ったり雑巾を縫ったりして供えたものでした。妊婦は安産を祈願して、さらし木綿の腹帯を台紙にとじつけて供えることもしました。

お地藏さんに供えてあるものは、何でもお借りして身に着けると御利益ごりやくがあるといい、頭巾、よだれ掛け、じゅばん、カネ、サルなどをお借りすることも多かったようです。子どもが生まれると、カネとかサルを一つお借りし、丈夫に育つようと、「袖なし」の背中にぶら下げて、背守りにしたものです。腹帯を借りてゆく妊婦もありました。お借りしたものは、翌年の巡行のとき、新しいものをそえてお返しします。

お産が軽くすむようと、お明かりに上げたろうそくの、なるだけ短くなったものを、いただいてゆく人もあります。この「おろう」が燃え尽きるまでにお産がすむように願って、陣痛がはじまると、ともしたものです。ろうそくと一緒に護符をいただき、陣痛がはじまると飲むこともしました。護符は、子どもの風邪や頭痛、腹痛などにも飲ませたといえます。

月の23日は、地藏尊が寺に帰る送り込みの日で、巡行先の講中の人たちが地藏尊を送り込んできます。送り込みのにぎやかなのは、春は3月4月、秋は9、10、11月で、なかでも立川を中心とする砂川講中の11月の送り込みは、昭和17年ころでも、四、五十人は下らなかつたそうです。講中によって最盛時には、百人から三百人に及んだこともあったといえます。

送り込みの夜と翌24日の縁日は、たいそうなにぎわいでした。送り込みの人に加えて、お地藏さんが帰られたといっで参詣する近郷近在の人たちも多く、境内から門前まで、さまざまな露店も並んで市が立ち、にぎわいました。文政年間（1818～1830）の『武蔵名勝図会』には、「毎月廿四日は門前市町の如く種々の商売の品を持はこびて、参詣の貴賤群集をなす」とあります。秋の市は、戦争の始まるころまでは、ひき続き開かれていました。

23日の夜、送り込みの人たちは、寺の本堂でお籠こもりをしました。年寄りが多いなかで、子どもを連れた人や子授けを願う夫婦もあり、また、嫁入り前の娘たちも加わることがありました。この夜、大施餓鬼会などの法要の後、お籠りの人たちは、夜のふけるまで、鉦をたたいて念仏を唱えたり、余興に唄ったり踊ったりして楽しんだものでした。寺でも、祭文語りや新家をよんだこともありました。寺の近くの子どもたちは、こうしたにぎわいに誘われて、本堂に集まってくるので、寺では子どもたちに影絵や灯籠をみせるなどしました。大正の初めころまでのことです。

翌朝、縁日の朝、数人の僧による、「朝課」のお経が上げられ、前夜からの行事は終わります。送り込みの人たちは、昼ころまでには引き揚げて行きました。

縁日の明るる日、25日には、地藏尊はまた、次の巡行地へと出かけてゆくのです。寺には、お留守番とよばれるもう一体の地藏尊があって、留守居役をつとめたものでした。

地藏尊の巡行は、昭和19年秋の砂川講中が最後で、各地の講中も解散しましたが、いまも11月の23日には、砂川講中ゆかりの立川や小金井の人たち、また、宮寺講中（入間市）の講元をつとめていた家の人たちなどが、寺にお参りに見えます。

なお、江戸時代から昭和10年代まで続いていた講中は、江戸時代には三月講中とよばれていた練馬・十条講中、天明の飢饉後から始まったと伝える宮寺講中、それに砂川講中の三講中でした。

泉龍寺には、まわり地藏の盛況時をしのぼせる、さまざまな文化財が遺されています。その一例として、天保15年（1844）に再鋳された梵鐘と、同時に建てられた鐘樓門も、地藏尊の信者、講中の寄附金などをもとにして、つくられたものです。

地藏尊が、もたらしたものは少なくなく、まわり地藏という信仰のかたちをとった、この地藏尊を仲立ちにして、延命、子授け、安産、無事な子育てを願う人々の切実なおもいを軸に、さまざまな交流の場がつけられ、ひろく各種の生活のつながりも生まれていたものと思われます。

〔付記〕 安永年中に地藏尊が造立される以前、泉龍寺には、寛延年中（1748～1751）に相州栗原（伊勢原市）の保国寺から譲り受けた子安地藏尊があり、まわり地藏として近郷の信者の家々に迎えられ、信仰をあつめていました。弁財天池の石橋は、宝暦2年（1752）、まわり地藏の賽銭によって修造されたものです。その地藏尊は、これより数年後、泉龍寺の末寺である武州下田（横浜市港北区）の真福寺に移り、江戸市中をはじめ、相模の広い地域にわたって巡行する、まわり地藏、「下田の地藏」として知られるようになりました。（狛江市文化財専門委員 中島恵子）

●参考文献 狛江市の巡行仏 狛江市史